# 市川橋遺跡

- 第18・21次調査報告書 -

平成9年3月

多賀城市教育委員会多賀城市建設部道路課

# 市川橋遺跡

- 第18・21次調査報告書 -

多賀城市は、史跡のまちづくりを推進し、文化財と市民との融 合・対話を実践していけるようにとの願いをもちながら日々それ に邁進しているところであります。近年においては、開発事業や 道路整備事業など住環境を充実させていくうえでの工事計画が市 内において多くなっており、それに伴い発掘調査の件数も増加し ているのが現状です。そのような状況の中で、市民共有の財産で ある文化財をよりよく保護・活用していくためには、史跡の保存・ 管理、そして、発掘調査の実施を通じて、そのすべてをバランス よく行っていくことが必要であると考えます。また、そのことが 「史跡のまち」を作り上げていくことへの基本になると考えます。 さて、今回発掘調査が実施された市川橋遺跡樋ノ口地区につい ても、道路整備事業の一環である市道新田・高崎線樋の口橋架換 工事に伴うもので、平成7年に引き続き2ヵ年の継続事業として 実施されたものであります。発見された遺構、遺物には平安時代 頃の竪穴住居跡、溝跡などがあり、多賀城跡を取り巻く土地利用 を研究する上で貴重な資料となるものと思います。最後に、本報 告書が文化財関係者のみならず、多少なりとも市民の皆様の文化 財に対する普及・啓蒙の一助となれば幸いです。

平成9年3月

多賀城市教育委員会

教育長 櫻 井 茂 男

# 例 言

- 1. 本書は平成7・8年度に実施した市川橋遺跡第18次調査と第21次調査の成果をまとめたものである。
- 2. 遺構番号は第1次調査からの一連の番号である。
- 3. 本書で使用した遺構の分類記号は次の通りである。
  - SB: 掘立柱建物 SD:溝 SE: 井戸 SI: 竪穴住居 SK: 土壌 SX: その他
- 4. 調査区の実測基準線は「平面直角座標系 X」を使用し、原点 X=-189635.000、Y=14090.000を通る南北方向の直線を南北基準線、これと直交する東西方向の直線を東西基準線とした。これら両基準線の交点を原点 0 として調査区内に 3 m の方眼を組み、東西方向は原点から東を E 、西を W として原点から 1 m 離れるごとにアラビア数字で、E 1 · E 2 · E 3 · · · · 、W 1 · W 2 · W 3 · · · · と表した。南北方向は北を N、南を S として同様に表した。
- 5. 挿図中の高さは標高値を示している。
- 6. 土色は『新版標準土色帳』(小山・竹原:1993) を参照した。
- 7. 第18次調査で出土した墨書土器については平川 南氏(国立歴史民俗博物館教授)より、また第21 次調査で出土した石製品(丸鞆)の石材については、蟹澤聰史氏(東北大学理学部教授)よりご教示 いただいた。
- 8. 本書の執筆は、A区を伊藤 浩、B区を高橋圭藏・伊藤が協議し、C区を高橋が行った。
- 9. 遺物整理及び実測図作成等の作業については、柏倉霜代、陶山喜美栄、村上和恵、大山真由美、赤坂菜緒子、秋本佳代、太田久美子、管野礼子、細野志乃、渡邊奈緒の協力を得た。
- 10. 調査・整理に関する諸記録及び出土遺物は、多賀城市教育委員会が一括して保管している。
- 11. 本書と他の発表資料とで見解が異なる場合は、本書の記述内容が優先するものである。

# 調査要項

1. 遺 跡 名:市川橋遺跡 (遺跡番号18008)

2. 遺跡所在地:宮城県多賀城市高崎字樋ノ口地内

3. 調 查 期 間: 第18次調查: 平成7年6月19日~8月31日

: 第21次調查: 平成8年6月14日~9月13日

4. 調 査 面 積:第18次調査:1,234㎡ (対象面積4,590㎡)

第21次調査:1,230㎡ (対象面積1,600㎡)

5. 調査主体者:多賀城市教育委員会 教育長 櫻井茂男

6. 調査担当者:多賀城市埋蔵文化財調査センター

第18次調査 所長 鳥山文夫

第21次調査 所長 木村忠雄

第18次調査 調査員 瀧口 卓 伊藤 浩

第21次調査 調査員 高橋圭蔵 伊藤 浩

7. 調査参加者:

第18次調査: 赤井ひろこ 加藤昭一 菅野文夫 今野和子 笹井希美枝 佐々木欣哉 田中ミョ 田中裕子 星 光治 星 秀雄 松岡美津枝 三浦あさ子 宮川ハルミ 山田吉之助

第21次調査:赤井ひろこ 赤間かつこ 浅野 真 阿部胞吉 阿部敏子 阿部美智子 安藤美喜子

内海義雄 遠藤一代 大河原政夫 太田恂一郎 大山貞子 小笠原マキ子 長田栄太郎

小野寺恵子 菅野恵子 熊谷あつ子 熊谷きみ江 熊谷サツキ 小松吉男 今野和子

後藤恵子 櫻井エイ子 櫻井くに子 佐々木欣也 佐々木軍治 下道博信 菅原吉明

鈴木寿二 高野敏子 武田みつ子 武田リキ 田中ミヨ 田中裕子 大道寺 勉 千葉享一 角田静子 橋本 務 早坂 剛 福永孝二 松岡美津枝 松本喜一

真野勝雄 宮川ハルミ 山田國子 山田弘子 渡辺幹子

# 本文目次

序文

例言

調査要項

本文目次

Ι.	市	川橋	遺跡の立	地と環境	1
II.	調	査に	至る経緯		1
Ⅲ.	調	查方	法と経過		2
IV.	調	査成	果		7
]	١.	基本	層序		7
2	2.	A地	区		7
		(1)	溝		7
		(2)	小	溝	. 8
		(3)	#	戸	. 9
		(4)	遺構以外	トから出土した <b>遺物</b>	. 9
3	3.	第1	トレンチ		10
4	1.	第8	トレンチ		10
5	· .	B地	⊠		14
		(1)	竪穴住	居	14
		(2)	溝		15
		(3)	土	壙	17
		(4)	その	他	18
		(5)	遺構以外	から出土した遺物	19
		(6)	遺構一覧	表	20
6		C地	<u> </u>		27
			掘立柱建	建物	27
V.	ま	とめ			28
VI.	プ	ラン	トオパー	ル分析	30
E	有	図版	******************		31

# Ⅰ. 市川橋遺跡の立地と環境

多賀城市は、宮城県のほぼ中央部に位置する仙台市の北東約10kmにある。市川橋遺跡は、多賀城市のほぼ中央部に位置し、市の中央よりやや西側を南北に流れる砂押川によって形成された標高2~3 mの微高地から低温地に立地している。本遺跡は北側で丘陵に接するように、東西1.4km、南北1.6kmに渡って広がっている。今回調査を行った場所は市川橋遺跡の南端部にあたる。この場所は砂押川から丘陵である高崎地区に移行している低湿地から微高地にかけてである。現在は水田として利用されているが、宅地化が急速に進められている場所でもある。

市川橋遺跡では、古墳時代から近世にかけての遺構・遺物がこれまでの調査で発見されている。(第3図) 特に平安時代を中心とする遺跡であることが知られており、市川字伏石地区や館前地区、鴻ノ池地区など では道路や掘立柱建物、竪穴住居が、高平地区では水田が見つかっている。

本遺跡の周辺には、特別史跡多賀城跡があり、多賀城の付属寺院である多賀城廃寺が東側の丘陵に所在 している。廃寺跡を取り巻くように高崎遺跡があり、西側の自然堤防上にある山王遺跡が本遺跡と接して いる。本遺跡を含めたこれらの遺跡は、古代多賀城と関連のある遺跡として重要視されている。

# Ⅱ.調査に至る経緯

多賀城市では、近年本市自体の都市化や隣接する仙台市からの住宅需要の高まりによって、市街地の拡大が急速に進んでいる。この傾向は、本市西部地区において顕著であり、本遺跡が所在する高崎地区でも 宅地開発や幹線道路の整備など、新たな土地利用が徐々に進んでいる現状にある。

さて、本調査については、市川橋遺跡の範囲の南東部に位置する高崎字樋ノ口地内における市道新田高崎線樋の口橋架換工事計画がその契機になっており、多賀城市道路課と教育委員会が事前に協議を行い、発掘調査を実施するに至ったものである。当該地は、主に水田として利用されており、隣接地においては、平成3年度の発掘調査(高崎遺跡第8次調査)で、掘立柱建物、溝、道路、水田等が発見されている。このことから、遺構が当該地にも及んでいることがほぼ確実なものと判断され、平成7年度より2ヵ年計画

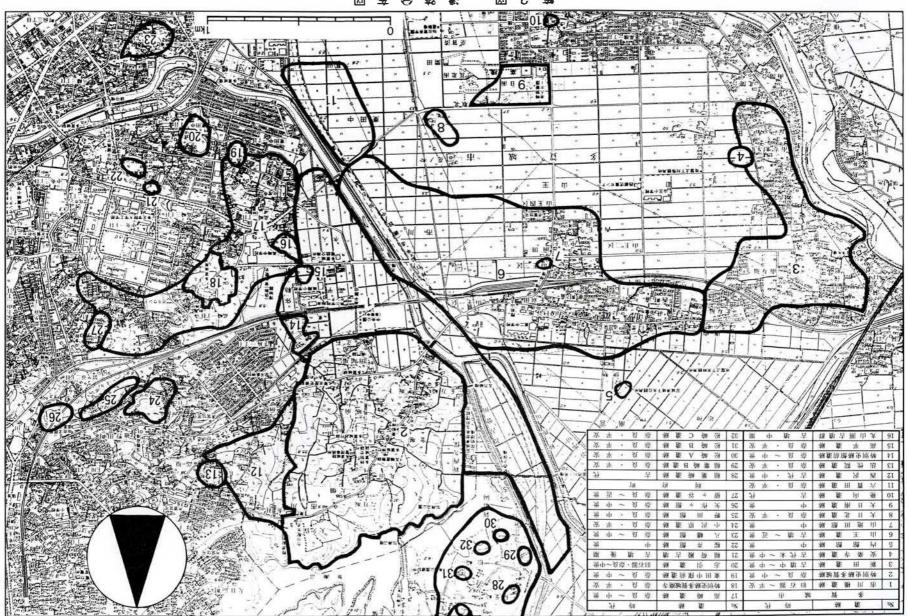
で発掘調査を行うこととした。平成7年6月から8月にかけて行った初年度の第18次調査では、A地区とした調査区西側の平坦面を調査し、調査区中央部のB地区において遺構確認調査を行い、それぞれにおいて遺構が存在することを確認した。調査2年目にあたる今年度の第21次調査は、B地区と市道に面し丘陵部である調査区東側のC地区の事前調査を実施したものである。

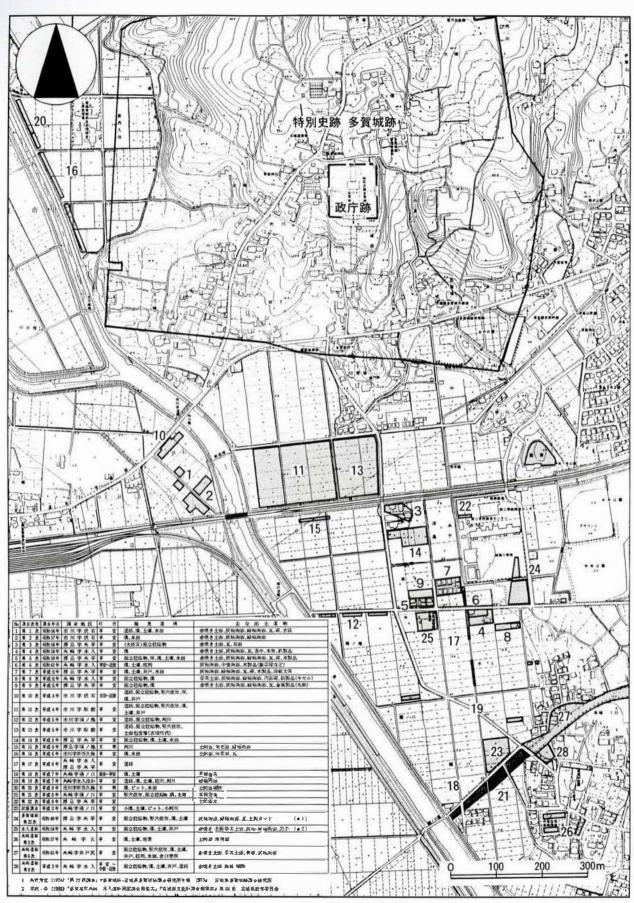


# Ⅲ. 調査方法と経過

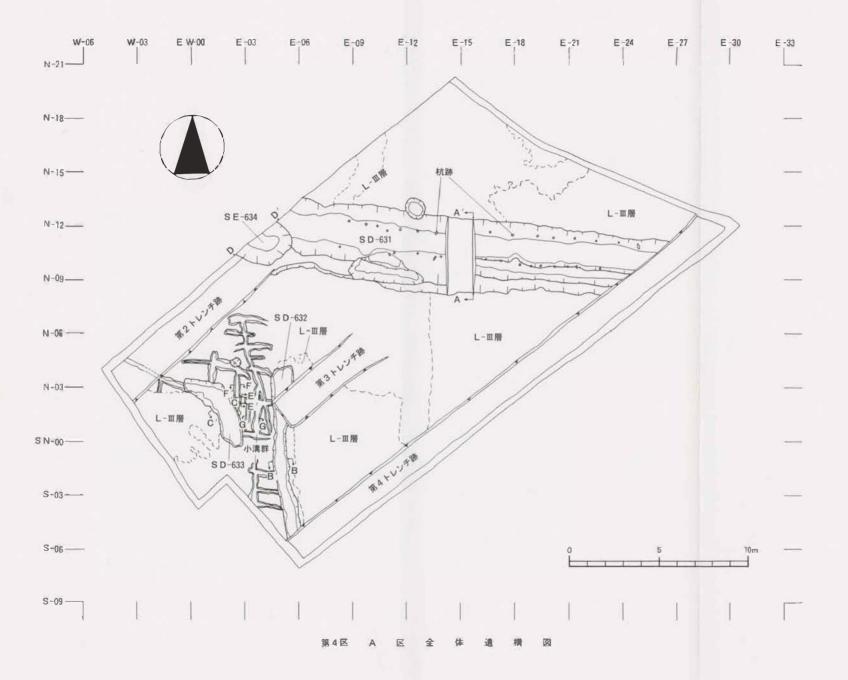
市川橋遺跡第18次調査は、平成7年6月19日より開始された。遺構の確認を行うため8本のトレンチを設定した。その結果、第1・第8トレンチでは遺構を発見できず平面図・断面図作成後直ちに埋め戻した。第2~第7トレンチでは地山面で溝や土壙を確認できたので同様の図面を作成し、第2~第4トレンチに再度重機を導入して、遺構を確認した範囲に限定して地山面までの表土・堆積層を除去した。この調査区をA区として、7月21日より排水溝を掘り、遺構検出を始めた。各トレンチの図面作成を終えた後、A区と並行して第5~第7トレンチの範囲をB区とし、7月25日に重機を入れて西側半分についてのみ表土剥ぎを行い、7月26日からは遺構の検出作業に入った。A区においては地山面で井戸1基、溝多数を発見し、7月31日から掘り下げを開始した。掘り終えた遺構から写真撮影を行い、図面を作成した。8月23日に遺構の掘り下げを全て終了し、A区の全景写真を撮影した。8月29日に重機による埋め戻しを行いA区の調査を完了した。8月22日には、体験学習ということで多賀城市立八幡小学校6年生の児童二十数名が発掘作業を行った。8月24日より中断していたB区西側の調査を再開した。B区西側の西端と東端にはLーⅢ層が広がっており、このLーⅢ層に挟まれる地山面で土壙5基と溝多数を発見した。掘り終えた遺構から図面を作成した。8月31日に今年度の発掘調査を終了した。

第21次調査は、平成8年6月14日に開始された。プレハブ周辺の草刈りなどの環境整備を行った後、B 区西側半分については、昨年度に表土剥ぎを終えていたので、6月19日から遺構検出に取りかかった。6 月27日、潰構を検出した状況で調査区西側の全景写真を撮り、平面図を作成しながら遺構の掘り下げを始 めた。遺構のほとんどが溝で、厚さ5cm前後の埋土しか残っていないほど残存状態が悪く、遺物も小破片 が数点出土する程度だった。7月31日、遺構の掘り下げもほぼ完了し、調査区西側の全景写真を撮影した。 また、調査地域の中で東端にあたる部分をC区として調査を行った。7月17日より重機による表土剥ぎを 行ったが、調査区内については、全面に約1.5m~1.7mほど盛土がありそれを除去することで、地山面を 確認した。7月25日より遺構検出作業に入り、遺構として掘立柱建物跡1棟を検出した。その後、柱穴の 断ち割りを行い、図面作成に入った。柱穴を完掘後、全景写真撮影を行い7月31日に調査を完了した。調 香完了後、工事及び安全面等を考慮して、8月5日より重機による埋め戻しを行った。8月2日、B区西 側では残った断面図・平面図の作成と並行して、作業員による遺構の埋め戻しを行う。8月6日から9日 にかけて、重機をもちいてB区東側のめくり返しを行い、8月9日から遺構検出を並行して行う。B区東 側も西端と東端にL−Ⅲ層が広がっており、両側のL−Ⅲ層に挟まれた地山面に遺構を確認することがで きた。8月12日から16日の間、発掘作業はお盆休みに入る。8月19日より発掘作業を再開したが、お盆休 み中に調査区周辺の水田に水が張られ、その影響で調査区の大半が水没してしまい、常時ポンプを稼働さ せて発掘を進めた。まず、LーⅢ層を掘り込んでいるSD-641を完掘してから、L-Ⅲ層の除去に取りか かった。それと並行して、地山面の遺構の掘り下げを行い平面図を作成した。9月2日、調査区北壁の一 部を拡張して竪穴住居SI-752の全体を確認し、5日から十字ベルトを設定して掘り下げた。9月13日、 数名の作業員に残った遺構の掘り下げや図面の作成を行ってもらいながら、これと並行して器材の搬出を 行った。また、プラントオパール用土壌サンプリングを行い全ての調査を終了した。





第 3 図 調査区位置図



# Ⅳ.調 査 成 果

# 1. 基本層序

L-I層: 表土、及び、現代の水田床土である。厚さ10~20cmで、調査区全体に広がる。酸化鉄が多く含まれている。

L-II 層: にぶい黄褐色(10YR 4/8)から黒褐色(10YR 3/1)のシルト質土で、少量ではあるが10世紀前半に降下した灰白色火山灰を斑状に含んでいる。厚さ5~10cmで、A区では調査区のほぼ全体に広がり、遺構を直接覆っている。B区では、調査区の南東部分でごく薄く確認できるだけである。

L-II層: 褐灰色 (10 Y R 4/1) の粘質土で粘性が強い。A 区および B 区で確認された厚さは $10\sim20$ cm程である。L-II層によって直接覆われている。

# 2. A地区

A区で発見した遺構には、溝3条、小溝16条、井戸1基がある。ここでは、主な遺構と出土遺物についての説明を行い、その後に堆積層出土の遺物について記述していく。

## (1) 溝

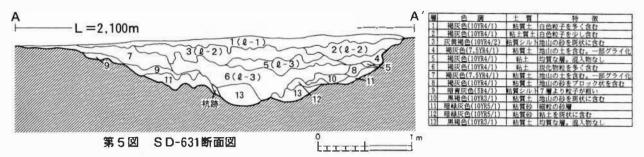
## 1. SD-631

調査区中央部で発見した東西溝でL-田層を掘り込んでいる。両で北に約5度傾く。SE-634と重複しており、これよりも古い。東西両端とも調査区外に延びており、確認できた長さは約22mである。規模は、上幅3.4~4.35m、底面幅1.15~1.3m、深さ53~71cmである。断面の形状は、底面から緩やかに立ち上がるが、南壁には段がつく。底面の両壁ぎわでは、杭跡を検出した。北側で15基、南側で16基を数える。杭跡の直径は約10cm、杭の間隔は狭い所で50~60cm、広い所では120~140cmあり、等間隔に並んでいる。溝の壁が砂層のため発掘している最中でも崩れてくることがあり、土留めに利用していたと考える。埋土についてみると、第6層には炭化物が多く含まれ、第12層には木屑が含まれていた。壁ぎわの埋土に地山ブロックが入っていることを除けば、ほかの層に混入物は見当たらない。

遺物は、土師器杯・大型甕・小型甕、須恵器杯・甕が出土した。第11図5は須恵器杯で、体部外面に墨書「而」が書かれている。底部は回転へラ切りで切り離されており、胎土中に海綿骨針を少量含んでいる。第11図6、9、10は土師器小型甕である。口径と器高はほとんど同じで、体部上半部に最大径がくる。体部の調整は摩耗が激しく判りにくい。ロクロを使用せずに作られており、底部には木葉痕が観察できる。また、胎土中に多くの海綿骨針が含まれている。6の小型甕には頸部から体部にかけて工具痕を観察することができる。第11図7は土師器大型甕の口縁部から体部にかけての資料である。口径が器高より小さく、かつ最大径が口縁にあり長胴形をなしている。頸部は「く」の字形に鋭く外反する。自然遺物ではクルミが出土している。

#### 2. SD-632

調査区南西部で発見した南北溝で、L-Ⅲ層を掘り込んでいる。北で西に約4度傾く。小溝群と重複しており、これらよりも新しい。溝の南端は第4トレンチによって壊されており、調査区の外に延びている



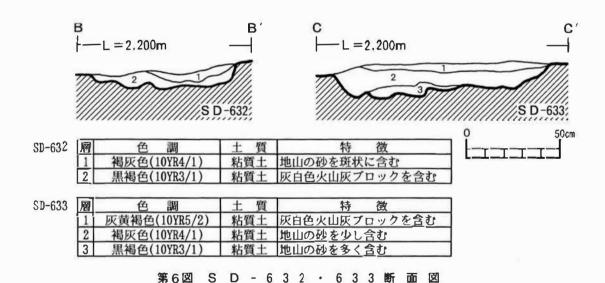
かは不明である。確認できた長さは9.9mである。規模は、上幅60~125cm、底面幅45~105cm、深さは8~9cmである。断面は、やや凹凸がみられる底面から緩やかに立ち上がっている。埋土は2層に分けられ、下層には灰白色火山灰がブロック状に含まれていた。

遺物には、土師器杯・甕がある。第11図11は土師器杯で、内面は横方向にヘラミガキが施され、体部下 半部から底部にかけて回転ヘラケズリされている。自然遺物では草食動物の歯が出土している。

## 3. SD-633

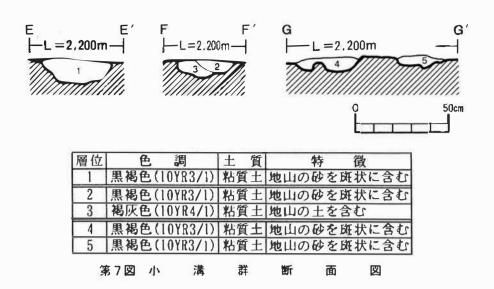
調査区西部で発見した南北溝で、L-Ш層から掘り込んでいる。小溝群と重複しており、これらよりも新しい。本溝は、大きく湾曲している。規模は、長さ約5.2m、上幅 $50\sim120$ cm、底面幅 $40\sim90$ cm、深さ $5\sim20$ cmである。断面の形状は、凹凸にとむ底面から緩やかに立ち上がっている。埋土は、3層に分けることができ、第1層には灰白色火山灰がプロック状に含まれていた。

遺物は、須恵器の体部破片、円盤状製品(第11図12)が第1層から出土した。



(2) 小 溝

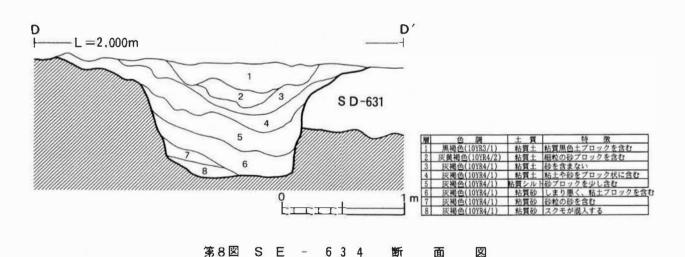
調査区西部の地山面で16条の小溝を検出した。東西小溝が10条、南北小溝は6条あり、両方向の小溝はほぼ直交するように走っている。 $SD-632\cdot633$ と重複しており、これらよりも古い。小溝同士の切り合いは確認できなかった。規模は、上幅 $20\sim60$ cm、底面幅 $15\sim50$ cm、深さ $1\sim10$ cmである。小溝間の間隔は、東西溝で約65 $\sim75$ cm、南北溝で約55 $\sim65$ cmと比較的等間隔に並んでいる。断面の形状は、やや凹凸のある底面から緩やかに立ち上がる皿状をしている。遺物は出土していない。



# (3) 井 戸

SE-634

調査区西壁で発見した井戸で、地山面から掘り込んでいた。SD-631と重複しており、これよりも新しい。西半部は調査区外にあるため明確ではないが、平面形は楕円形になると思われる。規模は径約2.5m、淡さ $1\sim1.2m$ である。断面の形状は、ほぼ平坦な底面より急に立ち上がり逆台形をなすが、上面付近では大きく開く。埋土は、地山の砂や粘質黒色土がブロック状に混入する粘質土層(第 $1\cdot2$ 層)と、ブロックを含まない粘質土層(第 $3\sim5$ 層)、砂層(第 $6\sim8$ 層)に分けることができ、第 $1\cdot2$ 層は人為的に埋め戻された様相を示している。遺物は出土していない。



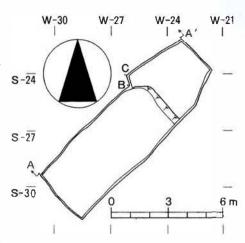
(4) 遺構以外から出土した遺物

A区の堆積層からは、土師器杯・高台杯・小型甕・壺、須恵器杯・壺・甕、中世陶器が出土している。 そのうち図化できたものは4点(第11図1・2・3・4)である。第11図2・3はL-II層出土の須恵器杯の底部破片で、前者は回転糸切りによって、後者は回転へラ切りによって切り離されている。両杯とも底部にヘラ描き「一」がされている。

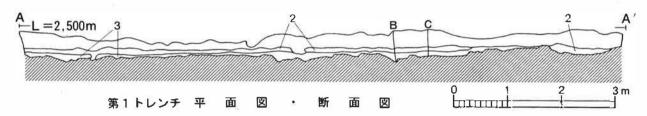
# 3. 第1トレンチ (第9図)

調査対象地の西端に長さ10.4m、幅3.2mで設定した。本トレンチでは遺構は発見できなかった。

遺物は、土師器杯、須恵器壺が出土している。第11図13は須恵器壺の口縁部破片資料で、内面と口縁部先端に自然釉が残っており、外面には釉が剥離した痕跡を観察することができる。

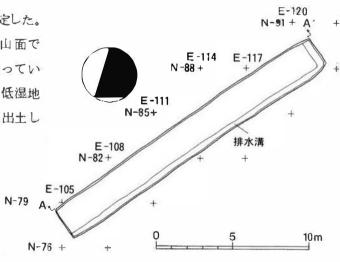


層位	色調	上 質	特。
1	オリーブ黒 (5Y 3/1)	粘質土	酸化鉄を既状に含む
2	オリーブ褐 (5Y 4/3)	シルト質粘土	オリーブ褐色の砂を多く含む
3	黒 褐 (2.57 3/1)	砂質	褐色の砂や黒色土を多く含む

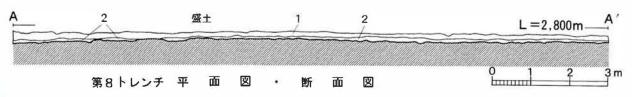


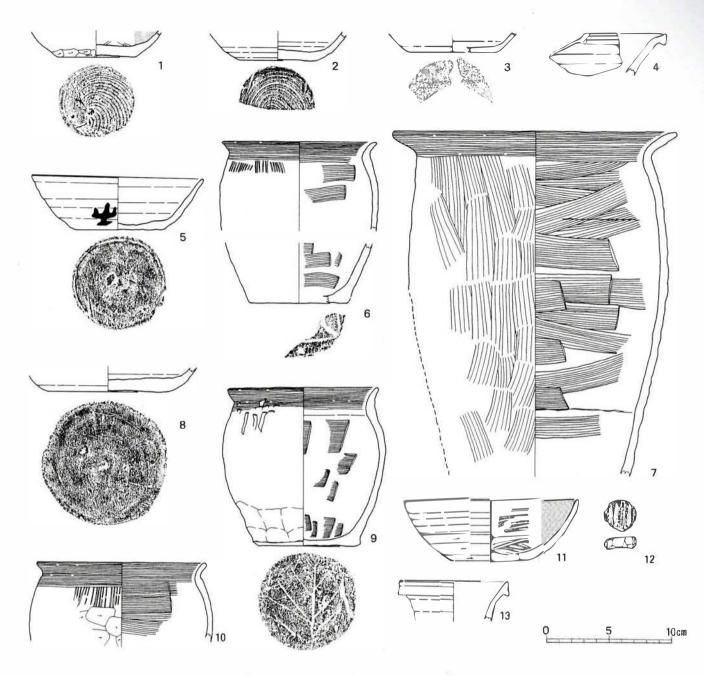
# 4. 第8トレンチ (第10図)

調査対象地の東端に長さ20m、幅2.3mで設定した。 このトレンチで遺構は発見できなかった。地山面で の標高は約2.3mで、A区よりも40cm程高くなってい る。土層堆積もA・B区とは異なっており、低湿地 から微高地に変わったことがわかる。遺物は出土し なかった。



層位	€	調	土	質	特	微
1	暗オリープ灰	(2.5GY 4/1)	粘土質	ンルト	しまりが弱く、	グライ化する
2	オリーブ黒	(5Y 3/1)	粘土質	ンルト	黒色粘土質シル	トが混入する





#### 第11図 A地区出十遺物

単位:cm ( )は推定値

Na	旗 獻	適構	廢位	<b>等</b>	(前 考	四 能	UE EK	25 13	35章k.Va	图形/9
1	1: 新器·杯	A 🗵	F - 1	(外) 手持ちヘラケズリ (内) ヘラミガキ、単色処理 (底) 回転条切り、無調整			6.0		R=24	
2	須 思 器 · 杯	A K	1-1	(外・内)ロクロナデ (近)樹に糸切り、ヘラ増き			(6.0)		R-25	
3	類 思 器 · 杯	A E	I I	(外・内)ロクロナデ (底)回転ヘラ切り、ヘラ増き	カダスを有				R-23	
4.	发 思 器 · 鬼	A EC	L - i)	(外・内) ロクロナデ					R-22	
5	和业器 · 杯	\$ 10-631	2-1	(外) ロクロナデ、根棒 (所) (内)ロクロナデ (近)回転へラリリ	海網份針	13.7	7.0	4.0	R-3	6-4
6	土師器・小型製	S D-631	0-2	(外) ヨコナデ、ハケメ (内) ヨコナデ、ヘラナデ (木葉瘊)	海綿作針	(12.4)	(7.8)		R-19	-
7	土 所 器 · 蜆	S D-631	6-3	(外) ナデ?ーョコナデ (内) ヘラナデーヨコナデ		22.9			R-1	6 - 1
8	新 恵 港 · 杯	S D-631	6-3	(外・内) ロクロナデ (底) 回転へう切り? 一手持ちへうケズリ			9.8		R-29	6-8
9	士師器・小型型	\$ 12-631	2-3	(外) ヨコナデ、ナデッケ、工具痕あり (内)ヨコナデ、ヘラナデ (底) 木葉似	海網作針	12.1	7.9	12.6	R-2	6-2
lD.	土・師器・小型製	S D-631	Q-3	(外) ハケメーヨコナデ・赤持ちヘラケズリ (内) ヘラナデーョコナデ	海綿骨針		(13.4)		R-31	
11	1: 節 器 - 杯	S D-632	Q - 1	(外) ロクロナデ、体部下半〜底部: 回転ヘラケズリ (内) ヘラミガキー服色処理		14.0	(6.4)	5.9	R-20	
12	四盤形虫製品	SD-633	0-1	(外) 平行叩き日、須恵器嬰を転用						
13	31 E & - 25	長トレッチ	L-I	(外・内) ロクロナデ、自然釉が残る		(8.8)				



# 5. B地区

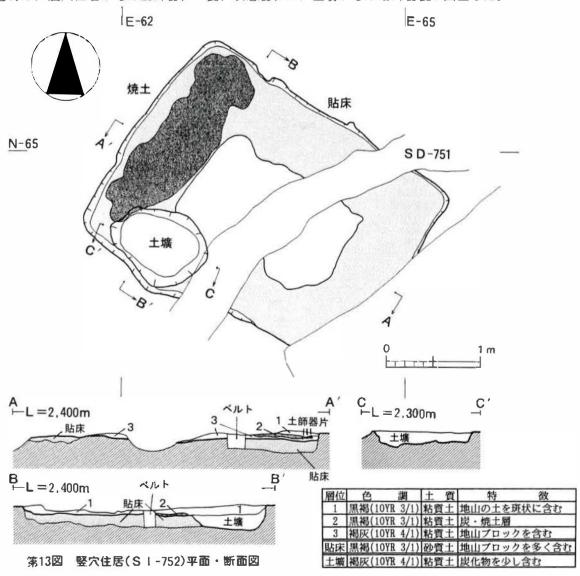
B区で発見した遺構には、竪穴住居 1 棟、溝57条、土壙10基、ピット 2 基がある。ここでは主な遺構の説明を行うことにして、その後で、堆積土出土の遺物について記述する。記述できなった遺構については一覧表の形式でその概要を掲載しておいた。

## (1) 竪穴住居

## S I -752

調査区南端の地山面で検出した。平面形は東西に長い隅丸長方形で、長辺約3.0m、短辺約2.3m、壁高は北西壁で約10cmである。住居の方向は北西壁についてみれば、北で東に約35度傾いている。SD-640・751と重複し、これらよりも古い。住居の残存状況は悪く、住居の北西部にのみ埋土が残っており、南東部では貼床が露出していた。カマドと主柱穴を発見することはできず、住居内施設として土壙1基を住居の南西隅において発見した。平面形は楕円形をしている。規模は、長軸約1.1m、短軸約0.82m、深さ10~15cmである。

遺物は、竪穴住居からは土師器杯・甕、須恵器杯が、土壙からは土師器甕が出土した。



## (2) 溝

#### 1. SD - 640

調査区中央の地山面で検出した。この溝は西にふくらんで弧を描くように南北方向に走っている。溝の東端は調査区外に延びているため、検出できた長さは約35mである。規模については上幅35~70m、底面幅20~40cmで、深さは5~12cmになる。SD-641・704・723・729・751・766、SK-643・SI-752と重複し、SD-641・SK-643より古く、これら以外よりも新しい。断面は、やや凹凸のある底面から緩やかに立ち上がる。埋土には、褐灰色の粘質土に灰白色火山灰のブロックが含まれている。

遺物には、土師器杯・甕、須恵器杯、平瓦、丸瓦、鉄滓がある。小破片で図示できなかったが、凸面をロクロナデした第 🛚 類(註 1 )の丸瓦も出土している。

#### 2. SD-641

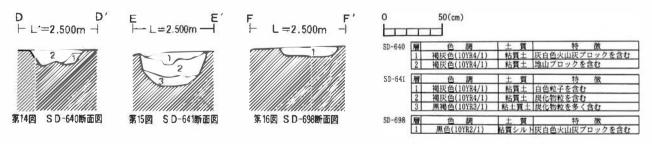
調査区の北部で地山面と第Ⅲ層を掘り込んでいる東西溝である。本溝の東半部は、東で北に約40度折れ曲がり、調査区外に延びている。検出した長さは約27.2mである。規模は、上幅55~65cm、底面幅32~45cm、深さ25~40cmである。 $SD-640\cdot729\cdot751$ 、SK-643、SX-693と重複しており、SK-643よりも古く、これ以外よりも新しい。SK-642とも重複しているが、新旧関係は不明である。断面は、平坦な底面から垂直に立ち上がり、「U」字形をしている。埋土は3層に分けることができ、下層になるほど炭化物粒が多く含まれている。ブロック状の土が混入していないことから、自然堆積したと考える。

遺物には、土師器杯・甕、須恵器杯、赤焼き土器杯、羽口片、鉄滓が、自然遺物には、モモの種子がある。

#### 3. SD-698

調査区中央部の地山面で検出した南北溝である。SD-640と並行するように、南から東へ西にふくらむ弧を描いて走っている。溝の北端は調査区外に延びているため、検出できた長さは約22.5mである。規模は、上幅約70cm、底面幅約65cm、深さ約 $2\sim10$ cmである。 $SD-699\cdot703\cdot704\cdot719\cdot723\cdot727\cdot728$ 、SK-642と重複しており、SD-719よりも古く、これら以外よりも新しい。断面は、平坦な底面より緩やかに立ち上がり、浅い皿状をしている。埋土は1層で、黒色粘質土に灰白色火山灰がブロック状に含まれている。

遺物には、底部が回転糸切り調製を行った土師器杯・甕、須恵器杯・甕がある。



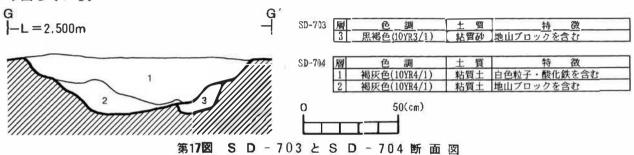
#### 4. SD - 703

調査区中央部で地山を掘り込んでいる東西溝で、東で北に約40度傾く。本溝は、SD-704によって大部分が破壊されているため本来の規模は不明であるが、検出した長さは約 $4.5\,\text{m}$ 、上幅35~50 $\,\text{m}$ 、底面幅は10~15 $\,\text{cm}$ 、深さ約 $16\,\text{cm}$ である。SD-704と重複しており、これよりも古い。断面は、平坦な底面から急に立ち上がり、逆台形をしている。SD-704に壊されて残った埋土は1層で、黒褐色の粘質砂が堆積している。 遺物は出土していない。

#### 5. SD - 704

調査区中央部の地山面で検出した東西溝で、東で北に約40度傾く。本溝の両端部はL-III層が広がっている。検出した長さは約12m、上幅55~120cm、底面幅30~50cm、深さ10~30cmである。 $SD-640\cdot698\cdot703\cdot723\cdot727\cdot729\cdot732\cdot751\cdot768$ と重複しており、 $SD-640\cdot698$ より古く、これら以外よりも新しい。断面は、やや平坦な底面から緩やかに立ち上がり、開いた逆台形をしている。埋土は褐灰色粘質土で2層に分けられ、下層は地山の砂ブロックが混入して、人為的堆積の様相を示している。

遺物には、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、円盤状土製品がある。第30図11は須恵器杯で底部に「十」が ヘラ描きされている。第30図9は土師器甕の口縁部片で、口縁に横ナデ調整を行い、外面に4つの段を作り出している。



6. SD - 710

調査区南部の地山面で検出した東西溝で、東で北に約5度傾く。溝の東端はL- 皿層、SD-749によって壊されているため検出できた長さは約5.5 m、上幅 $40\sim80$  cm、底面幅 $25\sim50$  cm、深さ $5\sim13$  cm である。SD-749 と重複しており、これよりも占い。断面は、凹凸のある底面から緩やかに立ち上がる。

遺物には、土師器甕、須恵器杯・壺、羽口、鉄滓がある。第30図14は須恵器杯の口縁部破片であるが、 先端部の厚みが体部よりも半分ほどになり段が付いているように見える。小破片のために、この段が口縁 部を一周しているものなのか、それとも製作過程でこの部分にだけ段のように付いてしまったものか判断 できない。L-I層からも小破片ではあるが、同様の遺物が出土している(第30図3)。

## 7. SD - 723

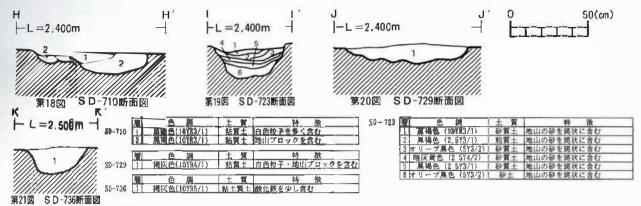
調査区中央の地山面で検出した南北溝で、北で西に約35度傾く。溝の北端は調査区外に延び、南端はL- 田層に壊されているため、検出できたのは長さ約22.7m、上幅45~55cm、底面幅20~30cm、深さ10~30cm である。 $SD-640\cdot698\cdot699\cdot704\cdot717\cdot718\cdot719\cdot725\cdot728\cdot729\cdot751$ と重複しており、いずれよりも古い。断面は、平坦な底面より急に内反して立ち上がり、「U」字形をしている。遺物には、土師器片がある。

#### 8. SD - 729

調査区中央の地山面で検出した。SD-640と同様に西にふくらみ弧を描くように南から東に走っている。 溝の南端はSD-704によって壊されており、検出できた規模は、長さ約27.7m、上幅 $60\sim75$ cm、底面幅 $45\sim55$ cm、深さ $3\sim15$ cmである。 $SD-640\cdot641\cdot704\cdot723\cdot751$ 、SK-643、SX-693と重複しており、SD-723よりも新しく、これ以外の遺構よりも古い。断面は、ほぼ平坦な底面より緩やかに立ち上がり皿状をしている。遺物には、土師器甕・須恵器杯がある。

#### 9. SD - 736

調査区 東端の地山面で検出した南北溝である。方向は、北で西に約25度傾き、南端は「L」字状に90度



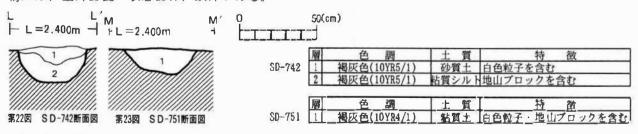
東に折れている。溝の両端は調査区外に延びており、検出できた規模は、長さ約11.7tn、上幅約40cm、底面幅 $15\sim20$ cm、深さ10cmである。SD $-742\cdot749$ と重複しており、これらよりも新しい。断面は、やや平坦な底面より急に立ち上がり、逆台形をしている。埋土は1 層で、しまりの悪い褐灰色の粘土質土が自然堆積している。遺物には、土師器杯・甕、須恵器杯がある。

#### 10. SD-742

調査区北東の地山面で検出した南北溝で、両端はL-III層に覆われている。方向は、北で東に約15度傾く。溝の東端は調査区外に延び、西端は第6トレンチによって壊されていたため、わずかの底面部分しか検出できなかった。検出できた規模は、長さ約14.6m、上幅 $0.5\sim1.5$  m、底面幅 $20\sim40$  cm、深さ $25\sim30$  cm で、東端部へいくほど上幅が広がっていく。 $SD-741\cdot772$ と重複し、SD-741よりも新しい。SD-772との新旧関係は把握できなかった。断面は、平坦な底面から緩やかに立ち上がるが、半分ほどのところで屈曲して垂直になり、椀状をしている。埋土については、地山面で検出した部分では、褐灰色の砂質土と粘質シルトの2 層に分けられるが、L-III層下で検出した部分は黒褐色の粘質土が堆積しており、粘性の強い埋土に変化している。出土遺物はない。

## 11. SD-751

調査区中央部の地山面で検出した溝で、SD-640と同様に南から東へ弧を描くように走っている。規模は、長さ約31.5m、上幅約50cm、底面幅 $20\sim30$ cm、深さ約10cmである。 $SD-640\cdot641\cdot704\cdot723\cdot729\cdot766、<math>SI-752$ と重複関係をもち、 $SD-640\cdot641\cdot704$ よりも古く、これらよりも新しい。断面は、平坦な底面から緩やかに立ち上がり、逆台形をしている。埋土は1層で、褐灰色の粘質土が堆積している。遺物には、土師器甕・須恵器杯、鉄滓がある。



## (3) 土 壙

# 1. SK-642

調査区の北東端で地山面を掘り込んでいる。平面形は楕円形をしており、長径1.8m以上、短径1.53m、深さ約50cmになる。SD-698、SD-715、SD-721、SD-722と重複しており、これらより新しい。SD-641とも重複しているが、新旧関係は不明である。断面は、やや平坦な底面より緩やかに内反して立

ち上がる。埋土は3層に大別でき、最下層は若干黒褐色粘土と地山の砂が入り混じった層をしているが、 いずれも自然堆積と考える。遺物には、土師器杯がある。

#### 2. SK-694

調査区南西端の地山面で検出した。平面形は歪んだ円形をしており、半径2.25m、深さ約75cmである。 SD-701・7●2・731と重複しており、これらよりも新しい。断面は、ほぼ平坦な底面より急に立ち上がり 逆台形をしているが、途中から緩やかに開いていく。埋土は2層で、上層は褐灰色の粘土質土に地山の土 がブロック状に入り、人為的埋土の様相を示す。遺物には中世陶器甕がある。

#### 3. SK - 760

調査区南東端でLーⅢ層下の地山面で検出した。土壙の南端は調査区外に広がっている。平面形は楕円形をしていると思われ、長軸3.4m以上、短軸約2.7m、深さ約25cmである。断面は、平坦な底面から緩やかに立ち上がり、皿状をしている。遺物には、土師器甕がある。

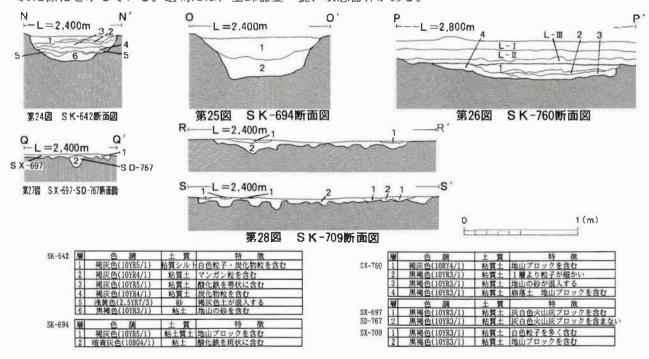
## (4) その他

## 1. SX - 697

調査区南端の地山面で検出した。調査区外に延びているため、遺構全体の確認はできていない。検出した限りでは、歪んだ隅丸長方形をしている。確認した規模は、長さ約1.62m、上幅約85cm、底面幅約50cm、深さ約5cmである。SD-767と重複し、これよりも新しい。断面は、凹凸のある底面より急に立ち上がり、浅い皿状をしている。埋土は1層で、黒褐色粘質土に灰白色火山灰がブロック状に混入している。出土遺物はない。

#### 2. SX - 709

調査区南部の地山面で検出した。不定形な平面形をしている。規模は、長軸約4.3m、短軸約3.5m、深さ10~14cmである。SD-708と重複しており、これよりも新しい。断面は、平坦面のない凹凸の激しい底面から急に立ち上がっている。埋土は、黄橙色の地山の土をブロック状に含んでおり、人為的に埋め戻された様相を示している。遺物には、土師器壺・甕、須恵器杯がある。



## (5) 遺構以外から出土した遺物

#### L一I層

表土及びL-I層から出土した遺物には、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕・蓋、中世陶器、円盤状土製品、土製品(人形)、羽口、鉄滓、草食動物の歯がある。第29図2は須恵器杯の底部破片資料で、体部下端から底部周辺にかけて回転ヘラケズリを施しており、底部の切り離しは静止糸切りである。第29図1は土師器杯の口縁部資料で、内外面ともヘラミガキ・黒色処理を行っている。土師器甕の底部破片は、底部に木葉痕が残っていることから、非ロクロ使用であることがわかる。第29図4の円盤状土製品は須恵器甕の体部を転用したもので、外面には平行叩き目がある。また内面の半分ほどの範囲にわたって光沢がつき、薄黒色に変色しているのを観察できる。転用硯として使用されていた可能性がある。

#### L一皿層

L-田層から出土した遺物には、土師器杯・甕・甑、須恵器杯・高台付杯・壺・甕・蓋、瓦、円盤状土製品、土製品(鎌)、石製品(丸鞆)、縄文土器、鉄滓、雲母、草食動物の歯がある。第29図23は石製丸鞆の破片資料である。石材は暗赤褐色の碧玉で、少し濁った乳白色の玉髄が混じっている。第29図13は須恵器杯の底部破片資料で、手持ちヘラケズリを底面全面に施してあり、切り離しは不明である。第29図14は高台付杯の底部破片資料で、体部下端は回転ヘラケズリが施されている。杯部と高台部の接合面となる底部周辺に、深さ約1mm程の2条の接合沈線を観察することができる。

この他遺構検出作業中に、土師器杯・鉢・甕・高杯、須恵器杯・壺・甕、羽口、鉄滓、草食動物の歯が 出土した。第30図2は土師器甕の底部破片資料で、木葉痕を観察できる。胎土中には少量の海綿骨針が含 まれている。

(註1) 宮城県多賀城跡調査研究所 「多賀城跡 政庁跡 本文編」1982

# 溝 覧 表

遺構番号	断	面	検出面	方向	長さ(m)	上幅(cm)	底面積(cm)	深さ(cm)	出土遺物	土層注記
S D -699	FL = 2.300m		地山面	N-55°-W	5.4	30~6●	2•~30	5		黑褐色砂質土
S D -701	├-L = 2,400m		地山面	南北	3.8	40	24	10		1. 褐灰色粘質土
S D -702			地山面	南北	4.4	40	25	12		2.褐灰色粘質土
S D -705	FL = 2,30		地山面	N-28-W	5.1	30~40	15~20	2~6		黒褐色粘質土
S D-706	FL = 2.200m		地山面	N-42"-W	8.5	36~96	24~52	3~7		黒褐色砂質土
S D-707	├-L =2,400m	<b>⊣</b>	地山面	E-5°-N	7.3	65~85	35~65	2~7	土師器杯 土師器 <b>變</b>	黒褐色粘質土
S D-708	⊢L = 2.40	0m-1	地山面	東西	5.7	30~50	22~28	5~10	土飾器豐	黒褐色粘質士
S D-711	L = 2,400m  -	-1	地山面	E-40°-N	2.3	24~30	16~23	2~4		黒褐色粘質土
S D-712	L=2.400m  -		地山面	E-24°-N	1.6	10~16	6~12	2~3		黒褐色粘質土
S D-713	L = 2.500m  -	<b>⊣</b>	地山面	E-14°-N	1.1	16~18	6~8	2~3		黒褐色粘質土
S D-714	L = 2,400m  -	1 +	地山面	N-26-W	1.4	18~32	12~20	4~6		1. 黑褐色砂質土2. 黑褐色粘質土
S D-715		-1	地山面	N-35-W	1.4	5 ~24	2~10	2~3		暗灰黄色砂質土

S D-716	L = 2,300m ├	地山面	E-32-N	1.3	12~22	6~8	2~3		1. 黑褐色粘質土 2. "
SD-717	L=2.400m F H	地山面	N-37°-E	1.6	10~18	6~10	2~5		1. 黒褐色砂質土
SD-718	L=2,400m   -   -	地山面	E-41°-N	1.6	10~20	6~12	2~3		黑褐色砂質土
S D -719	L=2.300m ト 寸 振りすぎ	地山面	N-8*-E	1.9	10~34	6~16	2~5		灰褐色砂質土
S D -720	L=2.300m  -  -  -  -  -  -  -  -  -  -  -  -  -	地山面	N-30°-W	0.78	14~24	8 ~20	2~4		黑褐色砂質土
S D-721	FL=2.400m	地山面	N-40 -W	1.7	43~62	38~48	3~8		黑褐色粘質土
S D -722	FL=2,300m -	地山面	W-45°-N	0.6	52~70	44~62	2~9		黑褐色粘質土
S D -725	L=2,300m ⊦	地山面	<b>N−3</b> 3°−E	4.4	12~22	6~10	2~3		黑褐色粘質土
S D-727	⊢L =2,400m→	地山面	東西	3.3	20~34	12~25	5~10	土師器杯	褐灰色粘質土
S D-728	⊢L=2.400m 1 -1	地山面	N-10 -W	4.6	35~120	25~35	5~15	土師器杯土師器甕	1.にぶい黄褐色砂 2.褐灰色粘質土 3.褐灰色粘質土
S D-732	-L=2,400m <sub>SD706</sub> <sub>SD732</sub>	地山面	N-37-W	8.7	76~110	62~88	4~10		黑色砂質土
S D-733	F1 = 2.200 m →	地山面	W-45°-N	4.8	34~104	24~64	5~9		黑褐色砂質土
S D-734	L=2.200m  -	地山面	E-33-N	1.3	12~22	6~8	2~3		黑褐色粘質土

S D-735	L=2.200m     振りすぎ	地山面	W-43-N	0.9	24~28	12~16	2~4	黑色砂質土
S D-739	⊢L=2.400m	地山面	N-5°-E	1.9	50~65	25	10~15	樹灰色粘質士
S D-740	├- L = 2.400m -	地山面	N-10°-E	3.4	45~55	10~25	10	褐灰色粘質土
S D -743	- L = 2.200m -	地山面	N-6°-E	3.9	20~38	10~14	4~5	黑褐色砂質」
S D-744	r-L = 2.200m -l	地山面	N <i>−</i> 35°-E	4.7	28~60	16~34	4~6	黑褐色砂質
S D-745	⊢ L=2,200m ┤	地山面	N-40°-E	2.6	32~40	12~22	4 ~ 6	黑褐色砂質
S D-747	- L =2.200m	地山面	N-39`-E	3.1	42~60	22~40	5~7	黒褐色砂質
S D-748	⊢ L=2.400m ⊣	地山面	E-42°-N	2.9	23~42	12~26	2~7	黒褐色砂質
S D-749	L=2,400m 1 1 2 3 0 50(cm)	地山面	蛇行	32.5	76~108	38~70	8 ~32	I.黑幾褐 空色 質 4.黑色 6 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
S D-750	- 2	地山面	E-45*-N	4.6	34~60	18~46	2~8	1.黑褐色砂質
S D-753	S D-753 S D-750	地山面	左カーブ	4.6	6~38	4~24	2~4	2. 黑色砂質
S D-754	L=2,200m	地山面	E-35°-N	4.8	16~34	6 ~-18	4~8	黑褐色砂質
S D-756	L=2.500m ⊢ →	地山面	N-40°-W 真北に直交	4.9	6~48	3~18	3 ~-12	黑褐色砂質
(	50(cm)		***					2

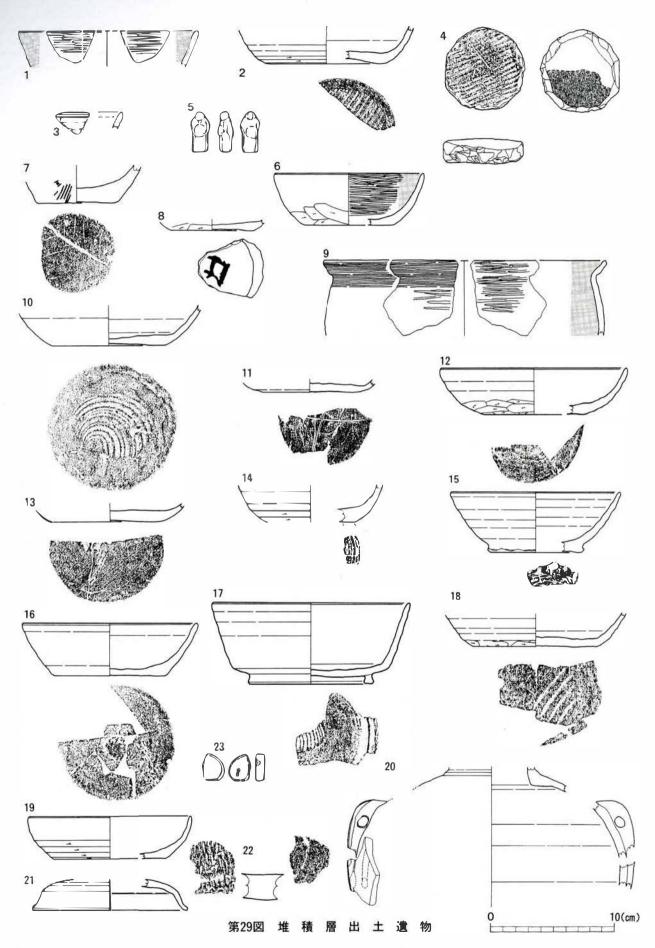
S D-757	FL=2.400m	地山面	E-20°-N	10	105~126	56~78	6~9		1.黑褐色砂質土
S D-761	LL = 2.400m	地山面	東 西	3.3	90~120	30~60	10~15		褐灰色粘質土
S D -762	⊢ L=2,400m ⊣	地山面	E-40-N	1.3	40	25	10		黒褐色粘質土
S D-766	}-L = 2.400m →	地山面	南北	2.5	50~70	25~35	15		1.灰黄褐色粘土2.黑褐色粘質土
S D -767	-L = 2,400m SD-767 SX-687 -1	地山面	E-10 - S	1.1	25	10	15		1.黒褐色粘質土 (SX-687は灰白色 火山灰を含む)
S D -768	⊢ L = 2, 400m →	地山面	w-40°-n	2.5	30~70	20~60	5		褐灰色砂質土
S D-770	⊢ L = 2.200m ⊣	L-UF	N-40-E	3.5	25~35	15~35	10		褐灰色粘質土
S D-771	I L=2.300m →	上-皿下	右カーブ	7.6	35~45	25~30	10		褐灰色粘質土
SD-772	⊢L=2,200m ⊢	L-NT	W-4 <b>0</b> −N	8.5	50~90	25~50	10	丸 瓦	1. 褐灰色粘質土 2. 黑褐色粘質土

遊園書号	断面	校出而	平面形	唯審	深さ	Hilt遺物	土層注記	遺練番号	断	西	換出面	平面形	直径	漢さ	出土遺物	土際往記
E-7-11	F-L=2,200r	地加	【扫形	42	21	なし	1.非褐色粘質上 2. 鼎褐色粘質上	20 h2	I-L=2.	200m	地山祏	円形	12	21	1:55% 片	楊灰色精士

0 50(cm)

# 土壙一覧表

		4		154		بمو	20			
遺構番号	断	面	検出	面	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	出土遺物	土層注記
S K-643	IL =2.500m		地上	1 面	隅丸長方形	1.7	0.7	10~15	モモの種子	褐灰色粘質土
S K-692	1—L=2.500m		地(	l 🛈	隅丸方形	1.35	1.35	50	土師器片 須恵器杯	灰色粘土質土
S K-695	I-L = 2.500m	7	地口	山面	隅丸長方形	1	0.7	20		         
S K-696	⊢L=2,400m		地(	山面	椿円形	0.9	0.75	3		褐灰色粘質土
S K-700	+L=2,500m	4	地(	山面	隅丸方形	0.9	0.83	8		黑褐色砂質土
S K-737	⊢L=2,300m		L	- Ш	円 形	1.3	1.3	20~30	土師器杯土師器甕	暗背灰色粘土質土
S K-746	iL=2,400m			- II	楕 円 形	1.25	0.61	10~20		灰色粘質土



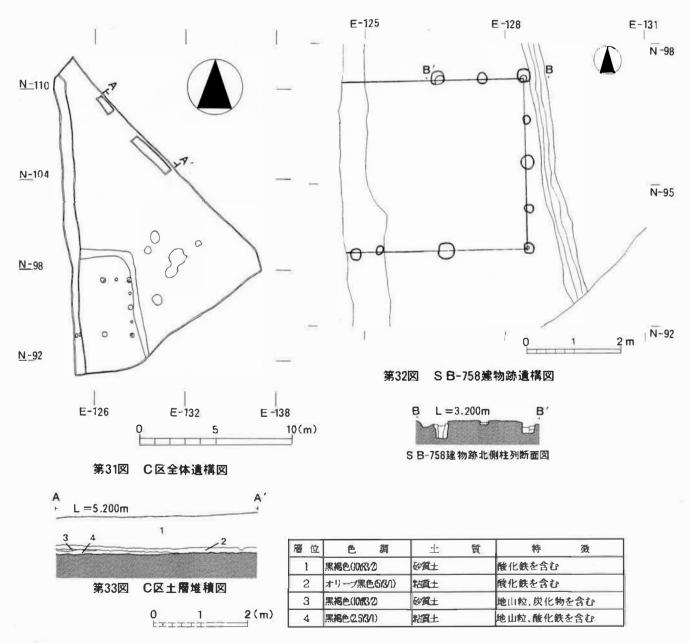


# 6. C地区

この地区は丘隆末端部にあたり、地山面の標高は、3.3mでその面から掘立柱建物跡と思われる1棟を発見した。

# ·SB-758掘立柱建物跡

調査南端部の地山面で、南北4間、東西3間及び2間の柱列を検出した。西側に建物がさらに延びる可能性があるため、ここでは東西棟建物と考えておきたい。建物の方向は東側柱列でみると、北で西に約1度傾く。桁行については、北側柱列が総長約1.81m以上、柱間が、西から約0.9m・約0.9mである。南側柱列は、総長約3.7m以上で、柱間は東から約1.7m・約1.4m・約0.5mである。梁行は東側柱列で総長3.58m、柱間は北から約0.9m・約0.9m・約1m・約0.8mである。柱穴堀り方は、ほぼ正方形で一辺14~33cm、深さは、確認面から2cmから36cmである。埋土は、黄褐色土を含む黒褐色土である。遺物は出土していない。



#### B区 堆積層出土遺物観察表

0. 9 10	通保	要位	25 00 24 55 42	闹 专	山雅	匝链	25	益味No.	<b>国版</b> Ne
1 M 8 - W	BIX.		(外・内)ヘラミガキ →限色効理		(14.4)				
2 温度額・終	82		(外)ロクロナデー体部下端~直端周辺:回転ヘラケズリ (内)ロクロナデ			(8, 9)			5-3
			(底)静止高切り						
3 油皮製・林	BØ		(外・内)ロクロナデ	口線先端に敗が付ぐ					
(四個株土製品。	Bı≚		(外)平行引きは (内)半分位の範囲に渡って光沢が付き無っぱく変色					R-35	
5 七個品(人形)	BE							R-5	
6 注明型 杯	BK	L-III	(外)ロクロナデ、体部下部:手持ちヘラケズリ (内)ヘラミガキー製色処理		(11.9)	(7-2)	(4.15)	R-17	-
			(底)貯蔵のため切り離し不明			10.00	1		
7 土飾器・見	BE	L-II				(6.2)			
8 土部第一件	BE	L-II	(外)体部一体部下盤:手持ちヘラケズリ (内) 暗滅のため不明 (底) 密線	疾部に及弃		(6.1)		9 20	5-
			のため切り着し不明	thind No. 0.1		(6.4)		R-26	$\vdash$
9 上降程·豐	BE		(外)口縁:ヨコナデ、体郎:ヘラミザキ (内)ヘラミガキ→黒色梅屋	海褐骨針を含む		(9.8)		R-19	3-
0 上海路 - 重	BE		(A・A)ロクロナデ (底)回転系切り→「周辺線)手持ちヘラケズリ			(7.0)	_	R-18 R-25	5-
1 領恩器・杯	BM		(外・内)ロクロナデ (校)回伝へラ切り一へラ語さり	1 11 11 11 11	416.03		3.7	R-12	3.
2 河巴西·杯	BZ	L-0	(外)ロクロナデ→体部下部↑平將ちヘラケズリ (内)ロクロナデ	火ダスキ程	(15.0)	(8.0)	3.4	K-12	
			(底)何をへう切り			-			
3928.4	BE	L-I	(外・内)ロクロナデ (底)単枠ちヘラケズリ、切り間し不明				_	2-14	5-1
4 須恵な・著行付杯	BE	L-II	(外)ロクロナデ、体部下端 回転ヘラケズリ (内)ェクロナデ	海台部分に2条の溝		(7.0)			
5 糸恵郡・杯	BE	111	(外・内)ロクロナデ (版)回転系切り?	底部に工具成?				R-20	5-
6 須急幣・杯	BØ	1 m	(外・内)ロクロナデ (症)向転へう切り		(14.0)	8.9	4.3	R-11	5-
7.亚惠普·高台付杯	BE	_	(外・内)ロクロナデー (底)回転糸切り…ロクロナデ		(15.8)	(9.8)	(6.45)	R-52	5-1
8 須恵器・杯	BE	-	(外)ロクロナデー体部下編 手持ちヘラケズリ (内)ロクロナデ			(9.2)		R+3	5-
			(底) か止糸切り一下けらヘラケズリ						
9 須喜菜 - ()	BE	1-11	(外)ロクロナデ 体部下半~底部:回転ヘラケズリ (内)ロクロナデ		(130)	(9.0)	(3.4)	R-10	1
0須思報、肥手付養	BE	10		表面釉質がれ落ち				R-28	5-
11 約亚岩·臺	BIA	L-I			(12.4)			R-21	
2 声瓦	BK	L-III	(凸面)端叩き目(叩き当がつぶれぎみ) (凹面)布目なし川B類 火作り	政庁 11 刻か □ 期					
22 6 64	BIZ		五林 · 柳玉					R-9	.5-

## B区 地山面 遺構出土遺物観察表

6.	N T	遺構	思位	と 面 調 整など	前が	□₩	欧洲	為高	급E5No	関係が
1	土部等、杯			(外)体帯下端:回転ヘラケズリ (内)ヘラミガネー8色処理			(7.0)			
			1	(底)切り雄し不明						
2	土所器・2	B⊯	地山南	(外)ナデ (内)ヘラナデ (底)木葉版	海绵骨針		(7.4)			
3	須恵器・盟	BE	地自画	(外) 平行叩き出 (分)ナデ (底) 不明	29 0.25		(20.4)		R-22	1.
	須恵器・杯	SI-752	1  -3	(外・内)ロクロナデ (底)回転売切り	· 7 m 8		(B. 4)		R-24	6-7
	土師器·杯	SO-640	1-1	(外)ロクロナデ (内)ヘラミガキ→風色効理	49 1 組織	(11.6)				
	平瓦	SE-640	1-1	(凸面)斜格子型を見 (凹面)布具-構位糸切り展	40711					I
	土飾器・杯	50-641		(外)ロクロナデ (内)ヘラミガキー黒色処理	口能に角性付長	(13.2)				
	土師器・雪	SD-704		(外)許減のため不明 (内) ヘラナデ (底) 木葉框			(8.0)			
	上師器・事	SD-704		(外)口絵:ヨコナデ、体帯:ハケメ 4内1口縁:ヨロナデ					12−30	6-3
	須恵器・杯	SD-704	1-2	(外・内)ロクロナデ (数)何 性切り		is .	(7.9)			
	須恵器・杯	50-704		(外・州)ロクロナデ 「屋」(州艦ヘラ切り一ヘラ福き「十」		(14.2)	7-8	4.0	R-2	6-5
	須恵器・杯	SO-704		(外・内)ロクロナデ (底)回転へラ切り?		(11.4)	(8.2)	(3, ?)	R-1	
	須恵器·高台付杯	SD-709		(外)ロクロナデ (州)ロクロナデー体部半一点部へラミガキ	T		(11.4)		R-9	II.
	須恵器・杯	S0-710		(外・内)ロクロナデ	口順先端に段が付く					
	須恵器・杯	SO-734		(底)回転へう切り?	内面に溶付着				R-27	6-6
	須恵器·麻	50-749		(外、内)ロクロナデ (底)回転糸切り		(16. 4)	7.5	5.7	_R-4_	
17	須恵器・見	SD-749		(外)ロクロナデ 症状文、条線 (内)ロクロナデ					R-5	
18	木製品 - 阿	SD-749		長さ14.2 個4.0 沙さし						6-9
	丸瓦	SD 7 7 2	坪	(凸面)平行門き目 (凹面)ボ月→一部ナデ 結1無きさ作り 政庁下開	海绵骨針					
	須恵器・見	SE-694		(外)ロクロナデ、ナデ 体部下半、手持ちヘラケズ! (内)ロクロナデ			(17.6).		R-3	
				(産)切り買し不明			1			

# V. ま と め

ここでは、発見した主な遺構の年代について検討してみる。

## $\mathbf{A} \mathbf{\overline{X}}$

SD-631、SD-632、SD-633、SE-634について検討する。遺構面を覆っているLーⅡ層については、灰白色火山灰をブロック状に含んでいることから、10世紀前半以降に堆積した層と考える。SD-631では、出土した土師器甕をみると、4点(第11図6、7、9、10)出土しているが、いずれも非ロクロ調整であり、小型甕の底部には木葉痕が残っている。また、器形については、体部最大径は上半部近くにあり、9にはヨコナデによって頚部に段がついている。須恵器杯(第11図5)をみると、底部が回転へラ切りの無調整であり、口径に対して底径が比較的大きめである。以上のような遺物の特徴は、多賀城跡で出土した8世紀末から9世紀前半の年代が与えられている土器と類似している。このことから、本溝が8世紀末から9世紀前半に機能していたと考えられる。SD-632からの出土遺物は、土師器杯(第11図11)1点のみである。この土師器杯は体部下半から底部にかけて回転へラケズリ調整を施したものである。また埋土に灰白色火山灰を含むことから、この溝の年代は、10世紀前半以前であったものと推定できる。SD-633は、遺物は出土しなかったが、埋土に灰白色火山灰が含まれていることから、10世紀前半以降には機能は停止していたものと思われる。SE-634は、遺物の出土がなかったが、重複関係よりSD-631よりも新しいも

のであり、L-Ⅱ層に覆われていることから、9世紀前半から10世紀前半以前の遺構とみられる。

# B 区

先に、主な遺構の重複関係について整理する。

$$\begin{array}{c} & \text{S D703} \\ \text{S D729} \rightarrow & \text{S D751} \rightarrow & \text{S D704} \rightarrow & \text{S D640} \rightarrow \\ & \text{S D720} \rightarrow & \text{S D719} \rightarrow & \text{S D698} \\ & \text{S D735} \nearrow \\ & \text{S D699} \\ & \text{S D702} \rightarrow & \text{S D701} \rightarrow & \text{S K694} \\ & & \text{S D756} \\ & \text{S D762} \rightarrow & \text{S D761} \end{array}$$

L-II層については、灰白色火山灰を含むL-II層に覆われていることから、おおむね10世紀前半頃を下限年代と考える。SD-641は、灰白色火山灰を埋土に含むSD-640より新しいこと、遺構埋土中に赤焼き土器が入っていたことから、10世紀前半以降に機能していたといえる。各遺構及び堆積層から出土した土師器の杯については、全てロクロ調整のものであることから8世紀後半以前には遺構年代は遡らないと考える。埋土に灰白色火山灰をブロック状に含む遺構(SD-640、SD-698、SX-687)については、10世紀前半以前に機能していたものと思われる。またSK-694は、遺構埋土中に中世陶器片が入っていたことから、中世以降に埋没したと考えられる。

L-Ⅲ層の一部から、イネのプラントオパールが検出されたことから、この層が水田の可能性のあることを示している。

# $\mathbf{C}$

掘立柱建物の年代については遺構内からは出土遺物が皆無であったため、決定することができなかった。 また、遺構を覆う堆積層についても現代の盛土を施していた地域であり遺物も出土しなかった。このため、 建物跡の年代については不明である。

- 1. 本調査では、全調査区で掘立柱建物 1 棟、竪穴住居 1 軒、溝60条、小溝16条、土壙10基、井戸 1 基、 ピット 2 基を発見した。
- 2. 古代の遺構については、8世紀末から9世紀前半の年代のものを発見した。灰白色火山灰を埋土に含む遺構については、10世紀前半以前に機能していたものである。中世の遺構については、土壌を発見した
- 3. L-Ⅲ層から、イネのプラント・オパールが検出されたことで、この層について水田の可能性がある。

#### <参考文献>

白鳥良一 「多賀城跡出土土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要VII』 1980 宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡第60次・61次調査」「宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991』 1992

# VI. 多賀城市、市川橋遺跡21次調査におけるプラント・オパール分析

# 株式会社 古環境研究所

#### 1. はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸(SiO2)が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石(プラント・オバール)となって土壌中に半赤人的に残っている。プラント・オパール(植物珪酸体)分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

市川橋遺跡21次調査の発掘調査では、A地点とした湿地層の一部に水田跡とみられる土層が認められた。そこで、A地点では稲作跡の探査を目的としてプラント・オパール分析を行うことになった。

#### 2 計劃

調査地点は、A地点である。分析試料は以下のとおりである。 A地点では、場灰色結士層よりNe 1. No 2. No 3の3点が採取された。

#### 3 分析方法

プラント・オパールの納出と定量は、「プラント・オパール定量分析 法 ( 藻原、1976)」をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料土の絶乾 (105℃・24時間)、仮比預測定
- 2) 試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40μm,約0.02g) ※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散 (300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子 (20 μ m以下) 除去、乾燥
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散. プレパラート作成
- 7) **检维·** 計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパール (以下、プラント・オパールと略す)を同定の対象とし、400倍の偏光 顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行っ た。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検験結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数(試料1gあたりのガラスビーズ例数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの側数の比率を乗じて求める)に換算して示した。また、おもな分類群については、この他に試料の板比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10-5g)を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米(2.94、種実重は1.03)、キビ族は上エ(8.40)、ヨシ属はヨシ(6.31)、ウシタサ族はススキ(1.24)、タケ亜科については数種の平均値(0.48)を用いた(杉山・籐原、1987)。

#### 4. 分析結果

稲作跡の探査が主目的であるため、同定は、イネ、キビ族(ヒエなど が含まれる)、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族(ススキやチガヤなどが 含まれる)の主要な5分類群を中心に行った。

採取された試料すべてについて分析を行った結果、イネ、キビ族、ヨシ属、ウシクサ族、タケ亜科の各分類群のプラント・オパールが検出された。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1に示した。また、主な分類群については巻末に顕微鏡写真を示した。以下、各地点における検出状況を犯す。

#### 1) A地点

本地点では、イネ、ヨシ属、ウシクサ族、タケ亜科のブラント・オパールが検出された。このうち、イネはすべての試料より検出された。Na1 とNa2では高い密度である。ヨシ属はNa2 とNa3で検出されたがいずれも飫い密度である。ウシクサ族はNa1 とNa2で検出されたがいずれも低い密度である。タケ亜科はすべての試料より検出された。密度はいずれもやや低い値である。

## **養1 市川福運跡21次調査のプラント・オパール分析結果**

	A地点				
分類群 \ 試料	No. 1	No. 2	Na 3		
イネ	69	64	28		
キビ族					
当シ間		7	7		
ウシカサ族(ススキ猟など)	19	7			
タケ亜科(おもにネザサ節)	63	49	35		

14	2.04	1.67	0.82
(イネ想)	0.71	0.65	0.29
キビ娘			
ヨシ■	ì	0.45	0.44
ウシクサ鉄(ススキ属など)	0.23	0.09	
タケ亜科(おもにネザサ節)	0.30	0.24	0 17

#### 5. 考察

#### (1) 稲作の可能性について

稲作跡(水田跡)の検証や探査を行う場合、仙台平野では、イネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ3,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、プラント・オパール密度にビークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくく、密度が基準値に満たなくても稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。以上のことを基準として、各地点ごとに稲作の可能性について考察を行う。

#### 1) A 地占

本地点では分析を行った3ヶ所すべてにおいてイネのプラント・オパールが検出された。このうち、Na1とNe2ではプラント・オパール密度が7,000個/g弱と高い値である。また、Na3でも3,000個/g弱と高い値である。したがって、本層準については耕作層であった可能性が高いと考えられる。

#### (2) 稲級の生産総量の推定

ここでは、耕作層の可能性が高いと判断されたA地点の3試料をもとに、それぞれの地点における稲級の生産総量の算出を試みた。その結果、面積103 (一反) あたりに換算すると、A地点では8.3 t と推定された。当時の稲級の年間生産量を面積103あたり100kgとし、稲蔥がすべて水田内に還元されたと仮定すると、A地点では約80年稲作が営まれていたと推定される。

なお、生産総量の算出に使用された平均層原は、A地点では15mである。

#### 6. まとめ

市川橋遺跡第21次調査においてプラント・オパール分析を行い、稲作の検証ならびに稲作跡の探査を試みた。

その結果、A 地点ではすべての試料からイネのプラント・オパールが 検出され、密度の平均値も5.0個個/g以上と高いことから、本地点についても稲作跡である可能性が高いと判断された。

#### 文献

杉山真二・糠原宏志 (1987) 川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析, 赤山一古環境綱一, 川口市遺跡調査会報告, 10, P.281-298

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種 イネ科栽培植 物の珪酸体標本と定量分析法-、考古学と自然科学、9、 P 15-29.

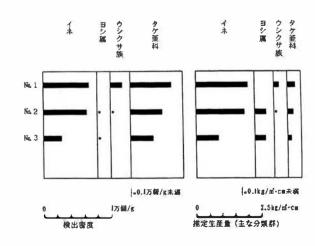
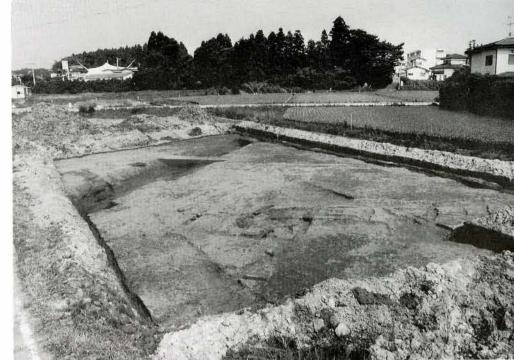


図1 A地点におけるプラント・オバール分析結果 ※主な分類群について表示。

A区全景 (西側より)

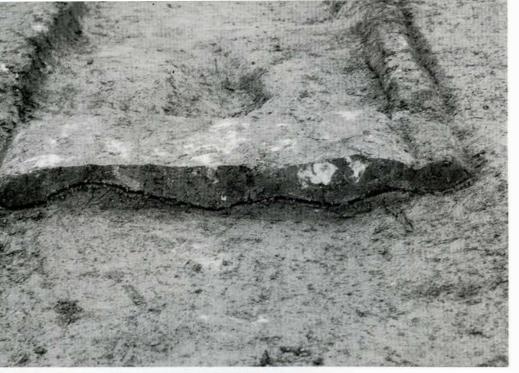


A区 SD631全景 (東側より)



A区 SD632埋土 堆積状況





A区 SD633埋土 堆積状況

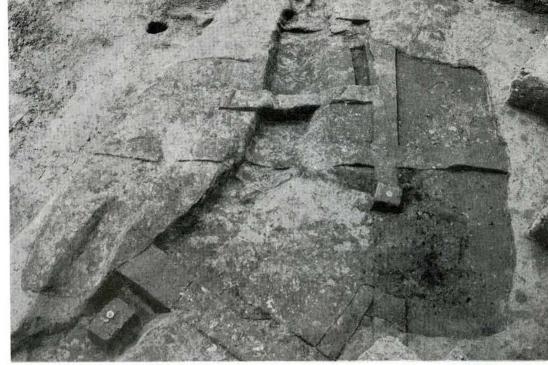


B区西側全景 (北側より)



B区西側遺構 掘り下げ状況 (北側より)

B区東側 S I 752住居跡 検出状況 (北西側より)



B区東側 S 1752住居跡 完掘状況 (北西側より)

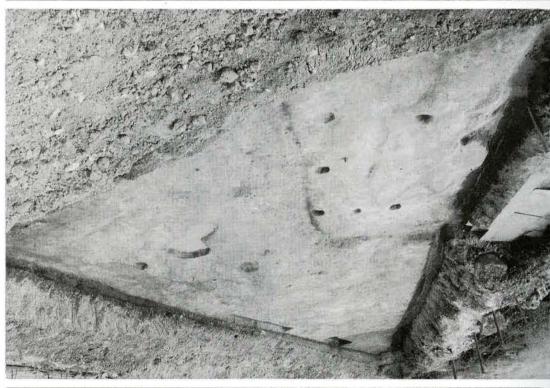


B区南壁 基本層 および SK760 堆積状況





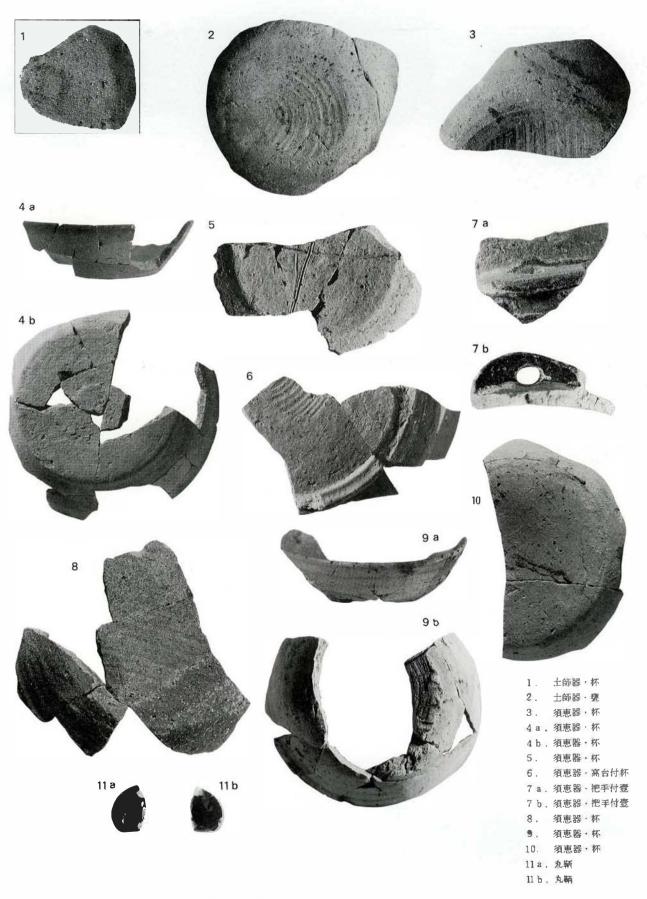
SBYS8建物跡(中国の19)



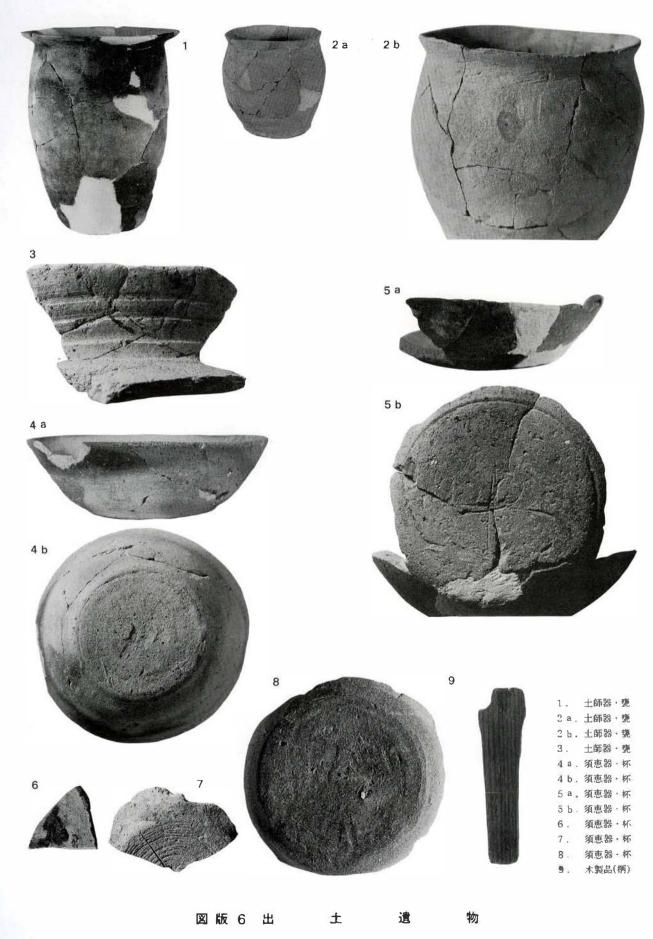
(区全景 (単単)



極素049G S 民
計
新
並



図版5 出 土 遺 物



# 報告書抄録

ふりがな	いちかわばしいせき
書 名	市川 橋 遺 跡
副書名	第 18 次 調 査 ・ 第 21 次 調 査
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 44 集
編著者名	高橋圭藏・伊藤浩
編 集 機 関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所 在 地	〒985 宮城県多賀城市中央二丁目27-1
発行年月日	1997年3月25日

ふりがな	3	りがな	コー	۴								
所収遺跡	所	在地	市町	村	遺跡番号	北	梅	東	経	調査期間	清極報(点)	調査原因
市川橋 (第18次)	高	賀城市 崎字樋 口地内	18		008	38°	17′29″	140°	59′40″	1995061 \( \) 1995083	1,234	道路建設
市川橋(第21次)	高	置城市 衛字樋 口地内	18		008		17'31" 17'32"		59'43" 59'45"	1996061° \$ 1996091	1,230	道路建設
所収遺跡	名	種	別		主な時代	1	とな遺	樗	主な	建物	特記	事項
市 川 (第18次	橋)	集	落	平	安	構井		戸		恵 器		
市 川 (第21次	橋()	集	落	平	安		立柱第		1	恵 器 新 器		

## 多賀城市文化財調査報告書第44集

# 市川橋遺跡

第18次調査・第21次調査

1997年3月25日発行

編 集 多賀城市埋蔵文化財調査センター 発 行 多賀城市中央二丁目27-1 電話 (022) 368 0 1 3 4 司 刷 富土印刷有限会社

多賀城市笠神五丁目15-28

電話 (022) 367-0 1 5 7